



モンゴル草原の朝 （佐藤國男氏撮影）

2016年の夏、モンゴル西部のホブド県に昆虫類の調査に行ってきましたので、そのときの様子をお話します。私はユーラシア大陸の草原性の蝶の調査採集に、西はトルコ、ロシアコーカサスから東の沿海州まで何回か遠征しているのですが、モンゴルは初めてでした。なぜホブド県の調査にしたかといいますと、日本から調査隊が入っていないこと（ロシア人の調査隊は入っていますが）、中国の新疆ウイグル自治区との国境地帯には何か面白いものが居るのではないかと期待からでした。また各種の高山植物、満天の星空に天の川など期待は膨らみます。日本からの一行は8名、6月27日に成田からウランバートルに入り、翌日朝、ホブドに向かいました。昼前にホブドに到着し、昼食後、我々はロシア製の四駆小型バス、荷物はヒュンダイのトラックに積み出発。現地のスタッフは旅行社の通訳オトゴンバイルさん（通称：オッコさん）、彼女は日本に留学経験もあり日本語ペラペラ、納豆も大丈夫という日本通。他に料理を作ってくれるお姉さん、バスとトラックの運転手の計12名です。はじめは砂漠の中の舗装道路を一路南下、西方に進路を変え、一つ峠越え、その後もう一つの峠の手前でゲルを立て、宿泊。今日は180Kmくらい走っているからうまくいけば明日は中国国境近くまでいける、と甘く考えていました。

翌日は雨がばらつく天気で、標高2900mくらいの峠を越えたところで雪になってしまい、おまけに道は湿地帯の真ん中を通っている。四駆の小型バスはなんとか走れるものの、トラックはぬかるみで立ち往生、バスで牽引して引っ張り出してもまたすぐスタック、トラックの運転手は、もういやだから帰る、と言い出す始末。トラックと荷物は置いて、しばらく走ったところで現地の方のゲルを借りることにしました。翌日は快晴、ゲルの近くの山で採集、予想より発生時期が少し遅れ気味のようでした。この日の昼食にゲルに帰ると、ストーブに大きな鍋が乗っていましたので、蓋を取ってみると羊の頭と足が丸ごと入っていてスープを取っているところでした。トラックは帰ってしまったので代替りの車を探すと、運よく地元の方の四駆のトラックが見つかり、今夜はゲルでなく、トラックの運転手の冬の家泊めてもらうことになり、この夜はゆっくり足を延ばして寝ることができました。





イダスシジミ



ジリス (佐藤國男氏撮影)

翌日は月が替わって1日、近くの谷で採集して、午後ブルガンの町を経て、中国との国境近くまで行きました。その翌日は曇り、それでも日が差すことを期待して国境に向けて出発。10Kmほど行くと国境警備隊のゲートで止められ、国境近くは外国人は許可無く立ち入ることは禁止、とのこと。ゲートの先が禁止かと思ったら、我々がゲルを立てて泊まった谷の入口から禁止で、罰金を日本円に換算すると2500円払えという。一人2500円かと思ったら全員でだそうで、2時間の立ち入りを許可してもらいました。警備隊の隊長さん自らの案内で向かった谷の上流の草原は確かにすばらしい草原でしたが、いかにせん太陽が出てくれないことには蝶が飛んでくれません。翌日に期待するも、また曇り。あきらめてホブドへの帰路をとることにしました。行きとはルートが違うが、帰りもまた峠越えが続くという。大丈夫か、6日の飛行機までにホブドへ帰れるのか？3000mを超える峠越えの連続でした。採集で息が切れるのは標高のせい？それとも年のせい？この高山帯で今まで見たことも無い、翅の裏側の小黑点が消えているヒメシジミ亜科の蝶がたくさん飛んでいました。帰ってから調べると、*Plebejus idas belchir* という名前がついていて、スペインから東シベリアまで広く分布する *P. idas* (イダスシジミ) という蝶の、ホブドだけに見られる特殊な亜種とわかりました。6日にはホブドの近くのアルタイムレスズメというマメ科の植物が多い乾燥した草原で採集すると、同じ *P. idas* だが、普通に翅の裏側の小黑点がある *P. idas sailjugemicus* という亜種が採集されました。両亜種は直線距離にして40Kmほど、標高差は600mほどしか離れていず、本当に同種の亜種関係か疑問の残るところです。最後の7日はウランバートルの近くのテレルジで採集して帰国しました。ホブドでは蝶のほかでは、タルバガン、ジリス、ナキウサギなどの小動物、アネハヅル、キガシラセキレイ、オガワコマドリなどの日本では珍しい鳥類、サクラソウの仲間、オダマキ、ウスユキソウなどの高山植物も沢山観察できました。いろいろな動植物が見られ、いろいろ大変でしたが楽しい調査旅行でした。



アネハヅル (佐藤國男氏撮影)



ウスユキソウ (佐藤國男氏撮影)